
前後不覚

天ヶ森雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

前後不覚

【Zコード】

N34710

【作者名】

天ヶ森雀

【あらすじ】

失恋した三十路男と、その後輩の酔っ払いグダグダ話。
ひたすら軽く、コメディです。

TINAMIより転載作品。

失恋

「うわあ～、俺はもう終わりだ～っ！」

「ハイハイ、さあ飲んで」

居酒屋のカウンターに突っ伏す俺を、後輩の一真は軽くいなして焼酎を注いだ。氷が多めで水は少なめ。長い付き合いだけあって、バランスはばっちりだった。

「あ、あとボンジリとレバ串と肉じゃがね」

「あいよ…」

カウンターごしに塙辛い頭の親父が威勢良く答える。

「大体、総務の女子なんて、我々には高嶺の花だって分かつてたじやないですか」

一真の言葉は的確で容赦ない。

「それでも可愛かったんだよ～。柳原さ～ん…」

分かつてる。三十路男の失恋なんか、誰だつて聞きたくないだろ？。けれど、1年越しの恋だったのだ。

「長い髪とか、小さくて柔らかそうな身体とか、うすくピンクのマニキュアを塗った爪とか！」

「ああ、彼女ナチュラル系でしたもんねえ」

一真はうんうんと相槌を打つ。

「内線もすごく優しいしゃべり方で『古市さん、請求書の提出お願
いします』ってなあ…」

思い出すとまた涙がこみあげてきた。

「ハイハイ、いいから飲んで忘れましょう。ね？」

「忘れられない」

「つたく…、おつちやん、生中追加！」

「へい！」

「一真あ、やっぱ設備なんて裏方はダメなのかなあ…」

「まあ、地味ですしねえ。そもそも、我々の仕事なんて誰も把握し

てないでしょ？

ぱつぱつ切り捨てられて、俺はひたすら頑垂れるしかなかつた。

俺や一真が勤める商業ビルの設備部は、主な仕事が熱源管理やその運営となつてゐる。普段は三階の隅にある中央監視室でガスや空調、電気、水質等のモニタリングをしているが、地下のボイラー室やコージェネなんて、一般社員はどんなものか、と言うよりその存在さえ知らないだろう。制服だつて地味な作業着系。他の社員の目に着くのは、せいぜい照明灯の交換くらいだ。

「不況のあおりで我々はどんどん営繕部と化しますしねえ」

一真は肉じゃがをつつきながら、苦笑した。

以前は大抵業者に修理を依頼していたものが、会社の予算の関係で「できるものは自分達で」と修理が回つてくる様になつたのだ。おかげでプールの排水詰まりから外周の植木の剪定、宴会が壊したテーブルの溶接まで面倒見ている次第。おかげで溶接やら養生やらやたら上達してしまつた。まあ、それは別に良いのだが。

「一真あ、俺つてダメな男かな。いいとこ全然ないのかなあ」

「そんな事ないですよ。ボイラーブローとか丁寧で的確だし、冷水と冷温水のヘッダーバランスも絶妙！」

「そんなの、専門過ぎて一般女子のアピールにならねえだろうが！」
「じゃあ…背が高いから九尺の脚立でも音楽ホールの管球交換ができるとか…」

「背だけかよ！」

ちなみに脚立は尺で数える。一段1尺（約33センチ）だから、九尺だと2・7メートルと言つたところだ。とは言え、脚立は一番上には乗るのは禁止だから、俺の身長＆手の長さを合わせて約4メートルまでは悠々届く計算。…本当にどうでもいいな。

「どう言つて欲しいんですか！」

「俺が幸せになれるつて言つてくれよ～」

一真は呆れて溜め息をつぐ。けれど、子供をあやすつて言つてくれた。

「古市先輩はいい男です。きっと幸せになれますよ」

「…本当に？」

上田遣いで聞き返す。

「本当に？」

「本当に？」

「ええい、くどいわ！」

後ろから背中をどつかれた。

一真が入れてくれた酎ハイを啜りながら、柳原さんに思いを馳せる。今、俺の隣にいるのが彼女ならいいのに。長い髪を揺らして笑つてくれてたら幸せなのに。いるのはでかくて眼鏡をかけて短い髪の一真だけ。

なあんて、こいつに聞かれたら畳まれそうな事を考えてたら、変なものが目に入った。

「…れ？ お前ピアスなんかしてたっけ」

「…たまに。仕事中は外しますが」

薄い耳朶に小さく光る石が左右ひとつずつ。ピアスなんて今時珍しくもないが、こいつがそんな小洒落たもんつけてるとは思わなくて驚いた。えーと、俺より五つ下だから、今26だっけ？

「へへへ」

「…」

「ほへへ」

「…」

「ふうん」

「何ですか！」

「ちくしょう、パリつとしたかっこじやがつて！」

「別にいいじゃないですか」

「あのなあ、比較物件が良ければ俺の評価は下がるんだよ。お前、結構ほかの部署の女の子とも喋つてるだい？」

「ああ、結構ほかの部署の女の子とも喋つてるだい？」

「それは…」

「それは何だよ！？」

「うちには厳ついおっさんばっかで話しかけにくって言つかる…」

それは本當だ。親方の五十になる課長を始め、総勢八名、全体的にじつい。固着したバルブの開閉や薬液の運搬など、必然的に力仕事は免れないから仕方ないのである。その中につつて、一真は比較的細いし若い。その一真さえ、軟水器用の塩袋30キロを、一人で持ち上げたりするのだが。女子が話しかけやすいのも分からなくなはない。俺だって若手の部類に入るんだけどなー。

「ちくしょう、こわつぱりした格好しやがって」

完全にハツ当たりだった。後輩の癖に先輩よりもてるとは生意氣じやないか。

「悔しければ古市先輩も制服にアイロンかければいいじゃないでしょう！」

制服にアイロンなんかかけてたのか、じいつ。同じ制服でも印象がちがう訳だ。

「馬鹿野郎！ 汚れるのが当然の裏方に、アイロンなんて必要あるか！」

「ハイハイ。いいから飲んで下さい」

酔っぱらじ相手に付き合つてられないと言つた風情で、一真は片手をヒラヒラふる。

「一真あ

「何ですか？」

「慰めろ！」

「慰めてるじゃないですか」

「ちくしょー…」

「はいはい。古市先輩はいい男ですよ」

「もつかい言つて」

「…おっちゃん、生中追加…」

「一真あ…」

泣きの入った俺を横目に、一真は黙々と白和えをつついでいる。
それがその晩の最後の記憶で、あとはよく覚えていない。

……筈だった。

不覺（ふかく）

せきやく

不覚

田覚めたら、全然知らない部屋だった。

「二二だ、二二？」

起き上がるうとしたら激しい頭痛に襲われる。

「ぐはっ！」

「ダメですよ、急に起き上がっちゃ。昨日何杯飲んだと思ってるんですか」

呆れた声が上から降ってくる。

「……真……？」

「はい、お水」

白いTシャツを着て、何故か眼鏡を外している一真が、ペットボトルを差し出した。

「お……」

そおっと起き上がつたら、肌掛けが捲れて、何も着てない身体があらわになつた。

「え？」

「えーと？」

……。

……これはきっとアレだな、酔つて吐くかなんかして、汚れた服を一真が脱がせてくれたりとかなんとか。……でも、ぱんつまで脱がす必要はないと思うんだが……。とりあえず、水を少し飲んで気持ちを落ち着ける。出した声が必要以上に低姿勢になつたのは、記憶がないから仕方ない。

「……えーと、あのですね、一真さん……？」

「ヤつちやいましたね」

「どわっ！ ななななな何を！？」

「覚えていないんですか？」

「ちょ、ちょっと待て！ 何かの間違いだ！ 今思い出すから！」

「… つつーつ！」

「あーあ、急に大声なんか出すから」

「嘘だろ？ 嘘だつて言つてくれよ」

「… 意外と良かつたですよ？」

慰めてるのかさらりと言つのが、却つて痛かつた。

「意外ゆうなあ！」

腋の下をだらだらと嫌な脂汗が流れる。

だつて一真だよ？ ヤツたつて何？ 有り得ないだろ？ が！

「責任取れなんて言ひませんから」

「責任て！」

「…まあまあ 良かつたですよ？」

「まあまあ ゆーな！」

「大体ねえ、何でもいいから慰めろつて言つたのは古市先輩ですか
らね？」

「だからつて」

「大変だつたんですから！ ぐでんぐでんの先輩をここまで運ぶの
！」

「無理やりタクシー乗せてうちの住所言つちまえば良かつたろ？ が
「給料日前で金ないからつてあの居酒屋にしたのは誰ですか！」

「そうだつた。思い出した」

「言つとくけど財布の中身なんかうちの部署は筒抜けですかね
確かに俺の家はK市だから遠かつた。電車で送つたら一真が帰れ
なくなる。180センチ以上のでかい男を担ぐなら、近場の自宅の
方がそりや良かつたんだろう。

「だがしかし。

「とにかく！ お互い大人なんですから、不慮の事故つて事で」

「…

「とりあえず、今日は先輩、遅番でしょ？ そろそろ用意した方が
「あ」

枕元にあつた目覚まし時計を見たら、勤務開始まであと一時間だつた。一真のアパートから会社は歩いて15分と言つてたから、シャワーを借りて着替えたらちょうど良いだろ？

「はい、アイロンかけときましたから」

「…サンキュー、シャワー借りるわ」

ソッポを向いて渡されたシャツは、きつちつ皺が伸びている。嫌な気の使い方だなあ、おい。こちらも皿をそらしたから、期せず手が重なつて慌てて払つた。

手のひらの感触から、不意に、ゆうべの一真の低い喘息声が蘇る。うわ！ 嘘だろ、俺！ やや前屈みになりながら、肌掛けを身体に巻いて風呂場に向かつた。

浴室に入る直前、ふと思いついて俺は尋ねた。

「一真」

「何ですか？」

「お前…下の名前、なんだつけ？」

「コーヒーを飲もうとしていた一真が急に吹き出す。

「チヨイ待てこら。3年も一緒に仕事してて、後輩の名前も知らんのか、あんたは…！」

「だつて、苗字でしか呼ばないから覚える必要なかつたし…！ 何でこんなに怒るんだよ、こいつ。

「…響子、です」

恐ろしく低い声が、ぶすつたれて答えた。

「キヨウコ」

無意識に口に出して呼んだら、何故か一真は真っ赤になつた。
えーと、…あれ？

「いいから早くシャワー浴びて来い！…」

先輩に対する言葉遣いと思えぬ乱暴さで、一真は俺に向かつて枕を投げつける。

慌てて俺は、浴室へと飛び込んだ。

きつと付いたコニッシュバスと、いい匂いのするボディソープ。なるほど、意識した事なかつたけど、そういうのが奴の匂いだつたな。

徐々に昨夜の記憶が甦りそうになつて、思わず頭を振つたら、一日酔いの頭痛でまた死にそうになつた。

えーと、おれ、失恋したばかりだつたよな？

一真はただの後輩で同僚だつたよな？

（お互い、不慮の事故と言う事で）

奴の台詞が甦る。

それが一番だと、頭の中で説得する俺がいる。
しかし。

覚えてないぞ、俺は。

思いのほか柔かかった肌とか、泣きそうな声とか。

ああ、覚えていないとも！

もちろん、さつきの真っ赤になつたうなじだつて見てないしな！

頭の中で頭痛と混乱がタップダンスを踏んでいる。

：嘘だろ？

勘弁してくれよ。

不覚を取つたとはいつこう事を言つただろ？

（この不覚は高価く付きそうだ…）

そんなことを考えながら、俺は熱いお湯を思いつきリシャワーから頭に叩きつけていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3471o/>

前後不覚

2011年4月27日14時25分発行